

29 死ぬ場所は家かホームか？

——としよりはことばがほしいの　もの言うたら返事してや　言うたこと忘れてまた言うて　うるさいやろけど返事してや——（角ミヨさん『女たちの詩コンサート』から）。

家庭でもこう切なく願うのが老年。老人ホームではなおのこと、優しい言葉がきりなく欲しいものです。しかし、寮母からの声かけは少なすぎます。無言のままの対応がどんなにか心を傷つけていることでしょう。

ましてや発せられた言葉が粗暴では、パンを求めて石をぶっつけられるようなものです。次は任運荘の最近の出来事です。

建物は旧基準で、車いす使用は予想せず、今は四人部屋に三台もあって狭い。某夜、白内障の婦人が「歩きやすいように車いすを上手に置いて」と寮母に頼みました。するとすかさず、「ここはあなただけの部屋ではないのよ。集

団生活なんだから。目が悪いのなら自分が気を付ければよいでしょう」と。

やがてこの事実が明らかになった日、その寮母は自発的に退職。十数年勤続のベテランだった。集団生活という高圧的な言葉も考えも絶対禁物という任運荘の方針を、結局、彼女は理解、容認できなかったのです。

お互いが厳しく戒め合っているのに、このように大過小過絶えないのがわがホーム。施設はまことに怖い所——つくづくそう思います。ですから、十五年の歩みには、五人もの不本意退職者を含む血と汗と涙がこめられています。

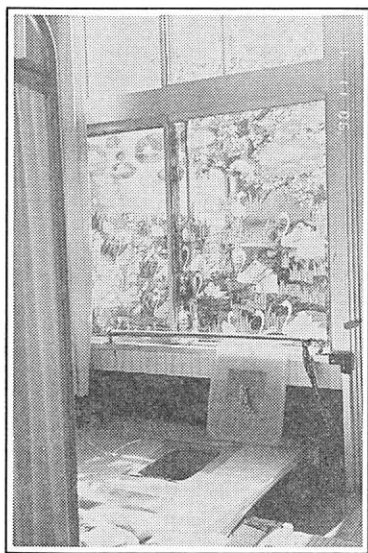
それでも私はあえて任運荘十三年目の年賀状に、

——手探りの歩みでしたが、次の六点はホーム存在の最低充足目標として実現できるようにしました。一、利用者の自由意志を決して束縛しない。二、おむつは濡れたら早めに換える。三、床ずれは作らない。四、雑居生活でもせめて間仕切りカーテンで人権を守る。五、悪臭根絶。六、ぼけの異常行動は世話の仕方が悪いから起こる——。

任運荘が世話になっている方面への誓いです。老人ホームがごくふつうの

伴いながらもこの実現がみられていることに、内心、私は最敬礼します。最高年の羽田野モエさんの歌——もろともにありがたく思うや日の本のここは楽土の任運荘かな——それは単なる作歌上の虚構ではなく、ホームに寄せる願いであると受け取りたいのです。

先の「集団生活だから」の舌禍事件の寮母以上の大過失（ナースコール脱落放置事件——理事長以下全幹部処分）の根本的反省として、昨年三月、高齢者



お座敷トイレ——窓ぎわに這ったまま行って使えるお座敷トイレ。外から見えないように切り抜きの絵をはりました。

暮らしに近づいた
めには、最も基礎
的な六点と信じま
す。

寮母十三人、看
護婦二人、相談員
一人、このわずか
の人員で、過失を

の心の中を聞かせてもらいました。意識不明等で返答のない十一人を除いた三十九人に。

一、「入所のいきさつ」について ①自分で決めた—九人 ②すすめられ一応納得して—二十一人 ③仕方なく—五人 ④だまされて—三人 ⑤不明—一人。七四%の人がはじめは不本意だったのです。

二、「では今の任運荘での暮らしは？」に対して ①満足している—二十八人 ②まあまあ満足—九人 ③どちらかといえば不満足—一人 ④よその施設へ移りたい—一人。①②合わせて九五%が満足としています。

こんな高い数字、私たちには信じ難い数字です。

良寛和尚の歌——いかにしてまことの道にかなわなん千年の中の一の一日なりとも——九五%という数字はこの歌の前で検証されねばなりません。高齢者がホームに抱く遠慮と警戒心、そして寛容に赦ゆるされたものにすぎません。

三、「家に帰って暮らしたくありませんか」について ①家で暮らしたい—五人 ②ずっと任運荘にいたい—十四人 ③任運荘にいて時々家に帰れるのが

よい—十八人 ④家に帰って悪くなったらここに戻りたい—二人。②③合わせ
てこれも八二%の高率です。

四、「死ぬ時はどこが良いですか」||①家—十四人 ②任運荘—二十四人(六
一・五%) ③病院—一人。

この数字は、ホームは単なる施設にとどまるな、という願いとして受け取る
べきです。終つひの住み家として限りなく家に近づくものでなければならぬ。そ
のためには今まで以上に汗と涙が流されねばなりません。